OPINION

教員主導の「学修者本位」から学生目線の「学修者本位」へ

―関大生の学びと成長加速プラットフォームでの試みから

教育改善に向けて学生が自律的に活動するプラットフォームをつくり、学修者本位の教育の実現につなげようとする関西大学・山田剛史教授。教員自身の「学修者本位の教育」への臨み方について提案する。

関西大学　教育推進部副部長・教授
山田 剛史 やまだ つよし

2000年関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業。2002年大阪教育大学大学院教育学研究科学校教育専攻心理学専修修了。2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科人間形成科学専攻発達基礎論講座修了。博士（学術）。島根大学教育開発センター講師・准教授・副センター長、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長、京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科准教授等を経て、2020年より現職。

コロナ禍で立ち上がった学生の教育参画

私が本学に着任した2020年10月。コロナ禍によりキャンパスへの入構が禁止され、授業はもっぱらオンライン。部活も、課外活動も、アルバイトもできない。学生は、自分の成長につながる活動に飢えていました。そのような中、コロナ禍における学生生活について学生自身がデザインするPBLを実施したところ、学生から「この授業でまとめた大学教育に対する自分たちの考えを大学に伝えたい」という意見が出ました。同時期に教職科目の受講者からも、同様の声が上がります。このような学生の創発的な動きに新しい可能性を感じた私は、活動を後押しすべく、教育開発支援センターのIRプロジェクトの一環として、「関大生の学びと成長加速プラットフォーム」を設置しました。

プラットフォームでは3つの学生ユニットが活動しています。PBL授業から発展したユニット「関大をデザインする」は、大学教育に対する提案をまとめて、教学IR・FD合同フォーラムでプレゼン。教職員や執行部から高く評価されました。教職科目受講者が組んだユニット「*1MOCA」は、授業観察や学生インタビューを行い、「学生が考える 学生にとって『よりよい授業』に必要な5つの要素」というレポートをまとめました【左図】。これは学内の会議やニュースレターでも取り上げられ、反響を呼びました。このほか、地域のサービスラーニングに取り組むユニットも活動中です。

プラットフォーム活動は、学生の自主性も生かしつつ、緩やかな公式化に向けて科目化をし、次のステージへと動き始めたところです。IRの活動にも学生の声を入れ、卒業したMOCAのメンバーをアドバイザリースタッフに迎えました。また、大学や学生への思いが強い職員とも、学生参画に向けて連携しつつあります。

大学のための〝参加〟と学生のための〝参画〟の狭間

これまで学生は質保証プロセスにおいて、〝お客様〟的な扱いであり、せいぜいアンケートの対象としか捉えられていませんでした。一部の大学においては、学生と、学生好きな教職員が自律的に学生FDなどに取り組んでいましたが、継続性に乏しく、大学全体の施策にはなりにくいため、今や下火になりつつあります。

しかし、国際的な質保証の潮流は学生参画に向かっています。日本の認証評価においても、第4サイクルで「学生の質保証への参画」が問われることになりそうです。

すると、どうなるか。恐らく今後、内部質保証委員会の下に「学生委員会」を設置し、「形」として、学生を「参加させる」大学が増えていくことでしょう。しかし、大学管理の「公式的」な委員会を設置するだけで、果たして学生は腹に思っていることを話すでしょうか？　たとえ本音の意見を述べたとしても、われわれ教員が自分たちの都合のいいことしか受け入れなかったら、それは、教員主導の「学修者本位」で、従来の「教員本位の大学」のままです。そのうち、学生は失望し、意見することをやめてしまうでしょう。

むろん、学生の意見が全て正しいわけではありません。しかし、対話を重ねる中で、学生も学内のさまざまな規約や制約を理解し、教職員の努力を理解していきます。加えて、自分の発言の重みを感じ、責任感を持つようになるでしょう。

学生参画型の大学づくりや質保証では、学生の自律性と学生目線での、緩やかな大学の公式活動化のバランスが課題です。その前提となるのは、学生に「自分たちも声を上げていいんだ」「自分たちの声が大学を変える可能性があるんだ」と実感してもらうこと。大学側と学生が信頼関係を築き、パートナーとして認め合うことが大切です。学生に迎合するのではなく、学生目線で大学のあり方を考えてみる。これが、本質的な〝学修者本位〟の根幹だと考えます。

今、社会にはさまざまな課題が山積しており、大学にはその課題解決に資する人材育成が求められています。われわれ教員に求められるのは、学生にいかに「自分が社会の課題解決に関与できるという実感」、つまり、当事者意識を醸成させるか。大学も一つの社会です。実社会に出る前に、まず、自分が大学の教育改善に関わる経験と実感があれば、卒業後、社会への参画意識がより高まるのではないでしょうか。与えられる一方の経験ばかりでは、当事者意識は芽生えません。その意味で、学生「参加」ではなく、「参画」なのです。

残念ながら日本では、大学に対する社会からの期待値が高くありません。税金の投入も寄付金も少なく、卒業生アンケートの回答率も低い。つまり、信頼されていないのです。私は、大学教育への学生参画こそ、その信頼回復につながると考えています。目の前の在学生が大学で成長実感を得たり、教育改善に参画し、自己効力感を高められる日常、環境をつくること。それが、彼らに卒業後、母校の価値を社会に広め、寄付や教育費の投資へと向かわせることにもつながるはずです。

大講義室の後ろから学修者の思いを想像する

学修者本位の教育に取り組むうえで、もう一つ重要なのが、われわれ大学教員は、勉強が好きで、〝学校という環境に過剰に適応して教員になった〟という自覚です。そのアクティブ・ラーニングは、手法のみアクティブで、相変わらず教授者中心の授業になっていないだろうか。そもそも「自分が」おもしろいことだけを教えようとしていないだろうか？　自分の興味と学生の興味は違う。「学生は」何だったら関心を持つのか。

学生中心の大学を提案した*2「廣中レポート」から20余年。私は、時折、大講義室の後ろから講義の風景を眺め、学生から見た大学教育を想像します。一人ひとりの教員が教壇から下りて、自分の授業を学修者の思いにくぐらせたときに感じる「違和感」を引き取る覚悟こそが、学修者本位の教育実現への第一歩ではないでしょうか。

取材・文／本間学　撮影／土屋剛

*1「Meet On Creative Academy」

「学生が考える学生にとって『よりよい授業』に必要な5つの要素」
～「関大生の学びと成長加速プラットフォーム」ユニットMOCA（Meet On Creative Academy）からの提案

1 心理的安全性を保証する
安心して学びに向かうための良い関係性・雰囲気づくり
先生と学生、学生同士の良い関係性・良い雰囲気づくりは、より良い授業の土台です。誰もが気兼ねなく、安心して自分の考えを言うことができ、異なる意見や想いを受け入れる雰囲気をクラス内につくること、つまり心理的安全性を保証することが必要です。

2 双方向性を取り入れる
先生と学生のコミュニケーション
一方向的に授業を進めるのではなく、学生の意見や考え、思いなどを聴き、リアクションを見ながら授業を進めてほしいです。先生が学生に問いかけたり、学生に考える余地を与えたりすることによって、学生は授業への参加感が増し、思考が刺激されます。授業に、学生をどんどん巻き込んでください。

3 多様性を取り入れる
学生同士のコミュニケーション
他の学生との学び合いによって、学生は新たな視点や気付きを得ることができ、自分の中で学びを深めることにつながります。他人のことを知り、受け入れようとすることは人間関係を築く上での素地となります。この素地の育成のためにも、授業は、いろいろな人と交流し、視野を広げることができる絶好の機会です。

4 思考をする場面を組み込む
学生が自ら考えを深める時間
インプットの時間だけでなく、学生が頭や心、身体を使いながらアウトプットをする時間を授業のどこかでつくってほしいです。講義内容の詰め込みや先生のしゃべりだけでは、学生の思考は止まります。学生が自分一人で思考をする時間や、他の人と交流しながら思考を深める時間が必要です。

5 授業展開を工夫する
学生の反応を考慮した上での授業内容と展開の吟味
「より良い授業」のためには、授業で取り扱う内容と展開が吟味されていることが重要です。授業の流れが順序立ててあり、論理的・具体的・実践的な授業内容であれば、学生の理解が進み、知的好奇心が刺激されます。思考の質も高まります。授業内容と展開の吟味の際にも、学生の反応や理解度を考慮していただきたいです。

*MOCAメンバー：奥村百香、井上優、岡本碧梨、中谷汐里（いずれも2019年度入学者）。授業中の教員や学生の反応の観察、学生10名へのインタビューとメンバー間の議論を経てまとめ。

▲MOCAが作成したレポート

*2「大学における学生生活の充実方策について（報告）ー学生の立場に立った大学づくりを目指してー」（2000年文部科学省より公表、通称「廣中レポート」）P.9参照